インクルーシブ研修だより

Ｎｏ．１２

２０１７．２．８　杉並区立杉並第四小学校　高橋　浩平

「待つ」ことの大切さ

先日、済美養護学校の学習発表会を見てきました。舞台発表の小学部高学年の劇の一場面のことです。

巧技台（小さい跳び箱のような箱）を一個一個運んで行って、最後に一番上の箱を置くのですが、角の所に突起があって、なかなかきちんとはめ込むことができません。すぐうしろに先生が控えているのですが、手伝わずに、じっとその子の様子を見ていました。何回かトライした後、ついにぴたっと箱が入り、その子は「やったぞ！」というような表情を浮かべました。会場で見ていても、とてもいい場面でした。

改めてふりかえってみると、私たちはこうした「待つ」時間を大切にしているでしょうか。子どもができないときに、すぐ手を出したり手伝ってしまったりということはないでしょうか。

通常学級で支援の必要な子についている介助員が転がった鉛筆まで拾ってやり、「鉛筆を拾うために介助をつけている訳ではない」、と教育長がよく言っていたのを思い出します。必要以上の介助はかえってマイナスになる、ということですね。

授業の場面で考えてみましょう。「この問題わかる人？」「はい」「はい〇〇くん」「……」指名した子どもの反応が返ってこない時、あなたはどうしますか？

よくあるパターンとしては、無言が耐えられずに「〇〇くん、どうした？わからないかな？次の人、指してもいいかな？」等、矢継ぎ早に声に出してしまう、ということがありますね。授業のテンポを乱したくない、とか流れを止めたくない、という考え方もありますから、「そこは無言で」と主張するつもりは

ありません。しかし、「もうちょっと待ってあげたら、子どもは答えたのになあ」という場面があることもまた事実です。

実際、教員は意外に「待つ」ことが苦手なんじゃないかと思う事があります。授業の場面をビデオに撮って再生してみると「けっこうしゃべっている」「けっこう子どもに指示を出している」とことがわかって愕然とすることもあります。

指導者として「待つ」ということがなかなか受け入れられないなら「子どもの様子を観察する時間をとる」というように読み変えてみてはどうでしょう。

「子どもの様子を見て、次の手を打つ」ということができるかどうかが授業を進める上で鍵になります。まさに授業はライブであり、生き物だともいえましょう。そのときに「子どもをしっかりと見取る」ことができなければ授業はうまくいかなくなることが多いように思います。

ただし、気をつけなければいけないのは、なんでもかんでも「待つ」ことがいい訳ではない、ということです。

「ここは待とう」「ここはこのまま行こう」とその瞬間瞬間、指導者は決断を迫られます。私は、指導者には「待つ」こと、あるいは「待たない」ことの根拠、が求められているのだと思います。ですから、「どういう意図で、どんなねらいでそうしたのか」と問われたときに、そのことが明確に答えられるならば、それなりに授業力がある、といえるのではないか、と思っています。

教員は日々授業を行っている訳であり、授業に追われている、ともいえます。でも時々は自分の授業を振り返り、「待った方がいいときに待つことができているかどうか」を確認してみるという作業をしてみるといいのではないでしょうか。

インクルーシブ教育を進める上では、高い授業力を持っているに越したことはない、と思います。「待つ」ことの大切さ、ということも少し意識して授業を進めていきましょう。

杉四小のインクルーシブ教育とは

「できないことをほったらかしにしない教育」